

ポポフ ニュース

15

2008年6月号

No.



ポポフ(POPOF)はポレポレ基金(Pole Pole Foundation)の略称で、1992年にコンゴ民主共和国で設立されたNGO(非政府・非営利団体)です。ポレポレとは「ぼちぼち」という意味のスワヒリ語で、あせらずゆっくりと運動の輪を広げていこうという気持ちがこめられています。

ポポフの目的は、コンゴ東部にあるカフジ・ピエガ国立公園の周辺で自然環境の保全、絶滅の危機に瀕するヒガシローランドゴリラの保護、地域振興、自然保護教育を実践することにあります。

会員はほとんど国立公園周辺に居住する地元の人々で、調査団を組織して土壌や動植物相の現状を調査したり、自然資源の持続的な利用をはかるように村人たちに呼びかけています。子供たちの年齢に合わせて環境教育のプログラムをつくり、就学前の児童から、大学生、主婦にいたるまでさまざまな教育事業を実施しています。また、国際交流を高めるために観光客に配布するパンフレットや絵はがきをつくり民芸品を販売して、地元でエコツーリズムを推進するための活動をしています。

こういったポポフの活動を支援するために、日本支部ではカフジ・ピエガ国立公園周辺の人々の生活、アート、ヒガシローランドゴリラを題材にした絵はがきを作成して販売し、展示会、講演会を開いて寄付を募り、現地で必要な物品を購入する資金にあてています。また、民芸品を作成する技術やアイデア、自然保護教育のための教材を提供したりしています。現地コンゴの政治情勢が思わしくないため日本ではまだポポフの会員を募集するまでに至っていませんが、将来日本からも人材を派遣してより国際的な活動ができるようにしていきたいと思っています。

ポポフニュースは、最近のポポフの活動を紹介し、今までに日本で集められた資金がどのような活動に使われたかを報告するニュースレターです。現

地の人々やゴリラの近況についても報告していこうと思います。また、ポポフが創作したポポフ・グッズや絵はがきの販売についても紹介しますので、お知り合いで興味のある方にぜひ伝えていただきたいと願っています。



阿部知曉画

活動報告

(2007年6月から2008年5月まで)

6月26日～7月1日 **2007年**

●ポポフ展(ポポフの活動紹介とグッズ販売)
堺町画廊(京都市)

6月1日

●「コンゴのゴリラと自然保護教育」
講演:バサボセ・カニユニ 堺町画廊(京都市)

6月3日

●国際理解教育「コンゴの自然保護教育」
講師:バサボセ・カニユニ

●絵本「ゴリラとあかいぼうし」読み聞かせ
山極寿一

●「ゴリラ・ダンスを踊ろう」
ワフワナ 京都市第4錦林小学校(京都市)

7月6日

●第23回日本霊長類学会大会プレ企画公開連続講座
「野生ゴリラのつきあいから学んだこと」
講師:山極寿一 大学サテライトプラザ彦根(彦根市)

7月27日

●「アフリカと友達になろう」
ワフワナ 長岡京市小学校(長岡京市)

8月18日

●「アフリカと友達になろう」
ワフワナ 同心児童館(京都市)

8月25日

●「アフリカと友達になろう」
ワフワナ 京都市右京区京北町(京都市)

8月27日

●法然院夜の森の教室「闇の中にゴリラの歌を聞いてみよう」
講師:山極寿一 法然院(京都市)

11月17日～18日

●サガシンポジウム「ポポフの活動紹介」
東京大学・上野動物園(東京都)

1月30日 **2008年**

●学ぶ意欲を育む授業づくり「ゴリラの子育てに学ぶ」
講師:山極寿一 伏尾台小学校(池田市)

5月4日、11日

●TBS動物奇想天外「カフジのゴリラと保護活動」放送
協力:ジョン・カヘークワ、バサボセ・カニユニ、山極寿一

カフジ・ビエガ国立公園の最近の自然保護活動

ジョン・カヘークワ

ポポフの目的は、カフジ・ビエガ国立公園の自然を保護するために、地元の人々がどのような生活を営んでいけばいいのかを考え、それを実践することにあります。そのためには自然資源に与える人間の影響を減らすような社会経済的な生活技術を身につける必要があります。それを達成するために、今年はいくつかの計画を考案し実施してきました。

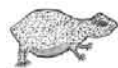
国立公園周辺の村々に植樹をする活動は 1997 年から行っています。それはまず、1) 1994-1997 年に隣国ルワンダからやってきて、公園周辺に作られた難民キャンプ住んでいた難民たちによって破壊された森林を回復させ、2) 地元住民たち自身がたきぎ、炭、建材などに用いる木材資源を育てる、といった目的がありました。2007 年の 11 月にポポフは苗木センターで 11,000 本の苗木を育て、公園に隣接する 4 つの村に配りました。苗木を配布する際にはセレモニーを催し、南キブ州の環境・観光局長や国立公園の公園長など多くの関係者が出席し

て祝辞を述べました。それらの言葉は、自然を愛し、植樹するように人々を導くような運動をしてくれたポポフに感謝するというものでした。ポポフは今年 5 つの大きな苗木センターをムダカ村、ミティ村、ブゴレ村、カタナ村に造り、それぞれのセンターで 100,000 本の苗木を育てています。これまでの活動を集計すると、1997 年以来 1,000,000 本の苗木をカフジ・ビエガ国立公園周辺の村々に配ったこととなります。これらの成果はポポフ日本支部をはじめとする世界の人々の支援の賜物です。

子どもたちの環境教育は順調に進んでいます。就学前の児童向けの環境教育 3 クラスは雨に耐えられるようにきちんと立て替えられました。でも、小学生用の 6 クラスを収容する建物は雨漏りがし、壁が崩れ落ちて乾季は埃が立ちこめます。もはや崩壊寸前で、早急に建て直さなければなりません。資金不足に悩まされています。中学生用の 6 クラスはコンクリートやトタンが準備されており、まもなく完成予定です。校長室ときれいなトイレも完備されることになっています。最初に入學した生徒たちは 5 年目を迎え、来年は国家試験の年となりました。彼らが目指しているのは農林業のエキスパートです。望みがかなえられれば、彼らは自然保護活動を実践する公園のレンジャーや、地域の保全、経済発展を指導する専門家になってくれることでしょう。元気いっぴいの彼らの行く末がとても楽しみです。中学校の生徒たちは、今年 5,000 本の苗木を育て、村々に配ってくれました。

今年から、ポポフの活動拠点の一つを国立公園の事務所に置くことになりました。それは、国立公園側がこれまでのポポフの活動に大きな関心をもち、協力して同じ問題に取り組みたいと提案してきたことが大きな理由です。ポポフもカフジ・ビエガ国立公園で働くレンジャー、

▶苗木を育てるポポフのメンバーたち



会計報告

「ろうきん東海NPO団体等寄付システム」から、寄付金をいただいています。グレイト・エイフス保護基金から寄付金をいただいています。

収入		支出	
昨年度よりの繰越金	408,950	ニュースレター印刷費	26,250
講演会・シンポジウム カンパ	29,829	ニュースレター・ホームページ作成費	20,000
展覧会売上	164,855	ポポフグッズ材料費	3,974
作品売上寄付	46,880	郵送費	38,020
ポポフグッズ売上(現金)	49,929	ポポフへ送金	1,749,570
寄付(現金)	836,000	次年度へ繰越金	449,535
売上・寄付(郵便振替)	750,000		
受取利子	906		
計	2,287,349	計	2,287,349

とくにピグミーの人々の子どもたちを主な対象にして環境教育を行ってきました。その効果を拡大させ、活動の場を広げるためには国立公園と協力していくことが不可欠です。レンジャーたちも公園で働く人々も国からは十分な給料が支給されておらず、何とか自活していかなければなりません。自然保護を村人に指導する立場のものが暮らしに困っているのは、人々のいい見本にはなりません。そこでポポフは、養鶏所をつくり、ヤギを1頭ずつ45家族に配りました。子供が生まれれば売却してもいいことになっています。また、キャッサバの粉引き機を事務所に備え、畑で収穫したキャアサバイモをここで粉にできるようにしました。こうすれば、わざわざ遠い市場まで行って、お金を払って粉にする必要はなくなります。さらに、こうした食料品を貯蔵して分配したり、売買できる倉庫を建設する計画を進めています。倉庫となる巨大なコンテナはすでに入手できる見通しがついており、後は資金をどうやって集めるかが課題です。人々が畑の作物を交換したり、協力して売買できるようになれば、人々の和と将来に向けた希望を高めることができると考えています。

日本の皆様から寄せられた基金は、学校建設や修復、教員の手当て、教材、苗木センターやアートセンターの運営、村々での自然保護普及活動など、さまざまな目的に使われています。1992年以來私たちが歩みを止めることなく活動を続けてこられたのは、日本の皆さんの暖かいご支援のおかげだと感謝しています。今年の8月にはイギリスのエジンバラで国際霊長類学会が開かれます。私もこの大会に参加し、山極さんといっしょにポポフの活動を報告して世界的な支援を呼びかけるつもりです。今後とも私たちの活動を見守ってください。

◆◆◆ 日本から贈られた車が活躍しています ◆◆◆

昨年、京都に住んでいる方から今まで乗っていたパジェロをポポフへ寄付したいというお話がありました。ちょうど来日中のバサボセさんと見に行くと、とても手入れが行き届いていて、まるで新品のように走ります。さっそく大阪の業者に頼んで輸出手続きをとってもらい、現地へ連絡して車を引き取る相談をしました。その結果、8月にパジェロは船でタンザニアへ向かい、9月にダルエスサラームへ着いて、陸路でタンザニア、ルワンダと走ってブカブの国境から無事入国することができました。

現在、パジェロはゴリラのモニタリング、物資やポポフのスタッフの移動、自然保護普及活動にと縦横無尽に活躍しています。コンゴの道は世界一の悪路で、雨が降ったらとても普通車では通行できません。そんなとき4輪駆動のパジェロはとても神々しく映ります。今年の2月に、ブカブでマグニチュード7を超える地震が発生した

▶カフジに着いたパジェロ



ときも、パジェロは人が人や物資を載せて走りました。いまやポポフだけでなく、地元の人々にとっても頼みの綱となっています。

このパジェロのももとのオーナーは、長年京都ですてきなバーを開いていた方です。1昨年病気で亡くなられたのですが、生前いつかこの車でアフリカを走りたいと話されていたそうです。愛用されたパジェロがコンゴで活躍しているのを、きっと目を細めてごらんになっているだろうと思います。

◆◆◆ 日本のテレビチームが撮影に訪れました ◆◆◆

昨年の12月に、TBSの撮影チームがカフジを訪れました。長い間カフジのゴリラたちは世界のメディアから遠ざかっていました。1996年の内戦が原因で、治安が悪化していたために観光客も取材チームも入国できなかったのです。昨年やっと国民投票で大統領が選出され、合法的な政府が成立しました。治安も徐々に回復しているので、久しぶりにゴリラたちの様子を撮影しようということになったのです。かつてカフジのゴリラは世界中の人々に親しまれていました。1970年代の初めからその勇姿を知られていた老ムシャムカ、コンゴのお札にも印刷されたマエシェ、子煩悩なやさしいムバララ、若くして集団を作ったムシャムカの息子ニンジャ。双子を産んだマトウィンや、子どもを連れて複数の集団をわたり歩いたビビなど、名前がついたたくさんのゴリラたちがいました。でも、これらのゴリラたちはほとんど内戦の間に死に絶えてしまったのです。今回、撮影チームが1994年に撮影したビデオを持ってきて、昔のゴリラたちの姿を見せてくれました。名付け親のジョンさんはビデオを見ながら思わず涙ぐみ、懐かしいゴリラたちの姿に見入っていました。

撮影チームはジョンさんやバサボセさんの案内でチマヌーカ集団やムガルカを撮影しました。まだ人に馴れてい

ないゴリラの集団も追跡し、何度もシルバーバックに怒られて、ゴリラと仲良くなる難しさを実感していました。チマヌーカ集団には子どもたちが13頭もいて、いつも競い合ってチマヌーカの背中によじ登り、遊んでいる姿がとても印象的だったようです。5頭もの子どもがチマヌーカの背中で折り重なって休んでいることもあったのです。まるでシルバーバックは遊園地のように見えました。お母さんゴリラたちは子どもをチマヌーカに預けると、さっさと食事に出かけてしまい、チマヌーカはいつもぞろぞろと子どもたちを引き連れて歩いていました。

撮影したフィルムは5月4日と11日に動物奇想天外で放映されました。ポポフの活動も紹介してくれました。見られた方も多かっただろうと思います。これらからも多くの取材チームが訪れて、カフジのゴリラたちの様子を世界に知らせてほしいと思っています。



▲ピチブ・ムフンブーカ画

ポポフのガボン訪問

ガボン、ドサラ村で安藤さんと村人とドミニク(前列右端)▼

ドミニク・ビカバ

今年の1月末に、私はダイアン・フォッシーゴリラ基金の援助で1週間ガボンを訪ねる機会を得ました。アフリカの別の国で生物の多様性やそこで暮らしている人々の生活、自然保護活動の様子を視察するプロジェクトです。私のほかにルワンダやウガンダで自然保護活動をしている人々が選ばれて同行しました。私はガボンで京都大学がゴリラの調査基地をもち、自然保護活動をしていることを聞いていましたので、ぜひそこを訪れたいという希望を出しました。それが受け入れられ、今回ガボンの南西部にあるムカラバ国立公園を訪ねることができたのです。

ムカラバ国立公園までは首都のリーブルビルから車で2日かかりました。公園の入り口にあるドサラ村で京都大学の安藤智恵子さんに迎えてもらいました。京都大学の調査基地に案内してもらい、森を歩きました。カフジと全く違う森で、植物も動物も初めて見るものばかりでしたが、ゾウやアフリカショウガなどカフジでお馴染みのものにも出会いました。ゴリラとの出会いはとても印象的でした。こんな難しい森で、よくここまでゴリラに近づけるようになったものだと驚きました。安藤さんたちのこれまでの努力の賜物でしょう。

それにもまして驚いたのは、安藤さんが村に溶け込んで活動していることです。ゴリラの大切さや自然を保護する重要さを、村人たちが安藤さんといっしょに学んでいる姿が印象的でした。安藤さんはとても村人たちから信頼されています。今後はもっと社会的な調査を増やして、自然保護と村の発展の両立を考えてほしいと思います。そういった努力をガボン政府の役人にも頼っておきました。ポポフもガボンの人々と手を結んで活動していきたいと思っています。京都大学の試みはきっと成功するでしょう。安藤さんとドサラ村の人々に深く感謝します。





◀チマヌーカと子どもたち

ゴリラたちの近況

昨年、チマヌーカ集団に赤ちゃんが生まれました。この集団には赤ちゃんと子どもがあわせて13頭になりました。当分ベビーブームが続きそうです。双子も3歳になりました。どうやら2頭ともオスのようです。もうあまりお母さんといっしょにせず、他の子どもたちと遊んでばかりいるので、どれが双子たちかを見分けるのに苦労するほどです。私たちがモニターしている9集団の合計は112頭になりました。少しずつ数は増えているようです。公園内でゴリラが殺されたという話は聞いていません。このまま平和な状態が続いてほしいものです。

さて、昨年の初めまでメスと2頭で暮らしていたムガルカは、8月にメスに去られてしまい、1頭で暮らすようになりました。一時は12頭ものメスと大きな集団を構えていたこともあったのに、なぜ次々にメスを失ってしまったのでしょうか。2003年に近くへやってきた同い年のチマヌーカにはメスがどんどん身を寄せて、子どもが次々に生まれているのは対照的です。ひょっとしたら、その理由はムガルカの右手が不自由なことにあるのかもしれません。ムガルカは子どもの頃にハネワナにかかって、右手の手首から先を失ってしまいました。生きのびられたことが幸いでしたが、おかげで右手で物をつかむことができません。とくに胸を両手で打つドラミングを満足に行うことができません。ドラミングはオスに特有なディスプレイで、手の平で胸をたたきポコポコポコと大きな音を立てます。オスどうしが出会ったときには、双方のオスがかわるがわる胸をたたいて競い合います。その勇壮なオスの姿を見て、メスたちはどのオスに身を寄せるのか決めるのだ

ろうと思われるのです。そのとき、片手でしか胸をたたけないムガルカは、メスにアピールすることができないのではないのでしょうか。事実、ムガルカはこれまでに何度もチマヌーカと衝突して、そのたびにメスを奪われてきました。大きな傷を負い、子どもが殺されてしまうこともありました。ゴリラのメスは子どもを殺されると、オスを見限って離れていく傾向があります。ゴリラの社会では、子どもの安全を保障するのは父親の役目だからです。ムガルカが子どもを守れなかったことが、その後すべてのメスが離れてしまった原因だったのかもしれませんが。

でも、ヴィルンガ火山群に生息しているマウンテンゴリラでは、かつてドゥメという片腕のないオスが数頭のメスと長い間暮らしていたことがあります。ムガルカは22歳で、ゴリラのオスとしてはまだ若者です。いつかきっと気の合うメスたちがやってきてくれるだろうと思います。そのときこそ、しっかりと子どもを守り、メスに気に入られるオスになってほしいものです。

ビリンドウワ集団やムファンザーラ集団は今、少し遠くへ行っています。しばらく行方がわからなくなったこともありました。でも何回か出会って数を確かめると、昨年からのメンバーは変化していないようです。ニンジャ集団の生き残りのイラギ、ゾヴ、クワレもビリンドウワといっしょにいます。3頭とも赤ちゃんを抱いています。ランガ、ムプングウェ、マンコトの3集団はシルバーバックがまだ若く、遊動域も定まっていないようです。何度か集団どうしの出会いを繰り返し、シルバーバックが胸をたたきあっているのが観察されています。今のところメンバーに変化はありませんが、メスたちが好むオスを選んで



▲阿部知暁画

移籍していくかもしれません。まだ名前のついていない集団が一つあり、ブラックバックがいることから年配のオスが率いる集団だと思われます。まだ人に馴れていないので、これから慎重に人付けをしていこうと考えています。

京都大学がモニターしているガニヤムルメ集団では、この4月に事件が起きました。トラックのマジェランさんがシルバーバックのアルフォンスに攻撃され、両足をのすねと腿を噛まれたのです。犬歯が肉を深く裂いており、マジェランさんは病院に運ばれました。幸いなことに大事にはいならず、すでに退院して今は現場に復帰しています。アルフォンスはおそらくまだ20歳前後で若く、自己主張の強いオスです。メスに自分の能力を示したかったのかもしれません。しつこく人間が追跡したので、いらだって攻撃してきたのでしょう。私も昔、ムシャムカという大きなシルバーバックに襲われたことがありますが、幸い咬まれずにすみました。でもいったん攻撃すると、オスは意外に落ち着いて人間を受け入れてくれるようになります。実力行使をしたことで気がすむのかもしれません。アルフォンスとマジェランさんも仲良く付き合えるようになってほしいものです。それまでマジェランさん注意を怠らないようにしてくださいね。



催しのご案内

ポポフの紹介とグッズ販売を予定しています。

多摩動物公園（東京）

●第12回サガシンポジウム

11月15日～16日

▼カフジ・ビエガ国立公園でモニターされているゴリラ集団の現在の構成

集団名	シルバーバック	ブラックバック	オトナメス	ワカモノ	コドモ	アカンボウ	合計
	13歳以上	8-12歳	8歳以上	6-8歳	3-6歳	0-3歳	
ムガルカ	1						1
チマヌーカ	1		17		2	11	31
ピリンドゥワ	1		3		3		7
ムファンザーラ	1		8		4	4	17
ランガ	1		5		1		7
ムブングウェ	1		6				7
ガニヤムルメ	1		8		1	3	13
マンコト		1	12	1			14
無名	1	1	10			3	15
合計	8	2	69	1	11	21	112



近刊案内

- 山極寿一著 NHK ブックス
『暴力はどこからきたか—人間性の起原を探る』
- 山田肖子編 岩波ジュニア新書
『アフリカのいまを知ろう』
- 国松俊英編 ポプラ社
『ゴリラをたずねてアフリカへ』
- 小風さち・阿部千暁著 福音館書店
ちいさなかがくのともし『とうさんごりら』
- 中道正之著 昭和堂
『ゴリラの子育て日記—サンティエゴ動物公園のやさしい仲間たち』
- 八田逸三・八田淳子著 文芸社
『ココロちゃんの物語』
- 丸山徳次・宮浦富保編 昭和堂
『里山学のすすめ<文化としての自然>再生にむけて』
- 総合人間学会編 学文社
『自然と人間の破壊に抗して』
- 高田公理・堀忠雄・重田真義編 世界思想社
『睡眠文化を学ぶ人のために』
- ドナ・ハート、ロバート・サスマン著 化学同人
『ヒトは食べられて進化した』
- 山本紀夫編著 八坂書房
『酒づくりの民族誌』
- 小長谷有紀編 東信堂
『家族のデザイン』
- 京都大学霊長類研究所編 京都大学学術出版会
『霊長類進化の科学』
- 京都大学総合博物館・京都大学生態学研究センター編
『生物の多様性ってなんだろう？』 京都大学学術出版会
- 山下晋司編 新曜社
『観光文化学』

ポポフ・グッズ通信販売のお知らせ

ポポフ日本支部では、ポポフの会員が作成したポポフ・グッズを販売して、その売り上げを現地の活動資金に寄付しています。ご協力いただける方は、郵便局で青色の振り込み用紙に口座番号：00810-1-90217, 加入者名：ポレポレ基金、と記入した上で、ご希望の品名を書き込み、該当する金額をお振り込み下さい。折り返し、グッズをお送りいたします。

- | | |
|--------------------------|-------|
| ☆ポポフ絵はがきセット (10枚組) | 1000円 |
| ☆ビチブ・ムフンブーカ絵はがきセット (5枚組) | 600円 |
| ☆東ローランドゴリラ・ペンダント | 2200円 |
| ☆東ローランドゴリラ・キーホルダー | 2200円 |
| ☆どこでもゴリラ・ブローチ (木彫り) | 3000円 |
| ☆ケイタイ・ストラップ (ミニゴリラ) | 3000円 |

2009年
ポポフカレンダーを作ります。
 200部限定
 見開きA4サイズ
 1部2000円(送料込み)
 発売開始 11月
ゴリラの写真や絵がいっぱい!!
 予約を受け付けます。
 ポポフグッズと同様、
 郵便振替でお申込下さい。



ポポフのホームページ

HYPERLINK

<http://jinrui.zool.kyoto-u.ac.jp/Popof/index.htm>

ポポフの活動紹介、カフジ・ピエガ国立公園、東ローランドゴリラ、ポポフ・グッズなどがカラー写真で紹介されている他、今までのニュースレターがすべて閲覧できます。ゴリラの歩く姿がとってもユニークですよ。ポポフのアーティスト、ダヴィッド・ビシムワが製作したアートも通信販売しています。ぜひ、一度ご覧下さい。

連絡先：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
 京都大学大学院理学研究科人類進化論研究室 ポポフ日本支部

お願い：ポポフの紹介とポポフ・グッズの展示・販売を各地で行いたく思っています。可能な場所と展示を引き受けてくださる方があれば、ご連絡下さい。

ククとシアフ(にわとりとサファリ蟻)

語り手：Malashi

むかしむかし。クク(にわとり)とシアフ(サファリ蟻)はなかのよい友達でした。

ある日、ククが「ねえ、ぼくのおじさんの所へいっしょに遊びに行かないかい」と言いました。

シアフは喜んで、二匹は一緒に旅に出ました。

やがて、かなりの道のりをきたとき、ククはうんこがしたくなりました。ククは「ちょっと、ここで待っていてくれないか」とシアフに言って、森の中へ入って行きました。ククが森の中へ入ると、大きなぞうが死んでいました。友達のシアフは肉が大好きです。このゾウのことを知ったら、肉を全部食べてしまうまで、ここから動かないでしょう。ククは、ぞうのことをシアフに言うのはやめておこうと思いました。ククは道にもどり

「さあ、先を急ごう」と、シアフに言いました。

二匹は、歩いて歩いて、やがておじさんの家に着きました。おじさんの家では、たいそうなもてなしを受けました。酒をふるまわれ、笑って楽しくすごすうちに、夕方になりごちそうが運ばれて来ました。ごちそうはご飯と、森の動物の肉でした。

食事が始まろうとするときになって、ククは表へ出て行きました。またククがもどって来たときには、シアフが肉を皿の下にかくしてしまっていて、おかずなしのご飯だけがありました。

二匹は食べ始めました。しばらくして、ククが「ご飯だけで、おかずはないのかなあ」と言いました。シアフは「そのようだねえ。おかずは来なかったよ」と答えました。ククはご飯を食べ、食べ終わると、おじさんたちとおしゃべりをするため、外へ出て行きました。

シアフは食べて食べて、ご飯を全部食べ終わる



と、かくしておいた肉も全部食べてしまいました。

あくる日、二匹は帰ることにしました。

道に出て歩きはじめると、シアフはククに「夕べは、どうしてご飯ばかり食べていたんだい。肉もいっぱいあったのに」と言いました。

「ええっ、なんだって」ククはびっくりして、地面にへたりこんでしまいました。怒ったククは、自分がかくしていたことも、シアフに話しました。

「じつはねえ、森の中で君の大好物のぞうが死んでいたんだ。旅をはじめた日に見つけたけど、君が知ったら、肉を食べ終わるまで動かなくなるだろう。だから言わなかったのさ」

「なんてこった。大きなぞうのこと、大きな肉のことをぼくにかくしていたなんて。君はひどいやつだ」と、シアフは怒りました。ククも

「君だって肉をかくして、自分だけで食べてしまったじゃないか。ぞうのことを教えてやっても、君はやっぱり肉をひとりじめしていただろう。君は肉が大好きだからなあ。ずるいやつだ。でもぼくたちはどちらも悪知恵がはたらくってことか」と言いました。

シアフは森の中にあった肉のことを思うと、くやしくてしかたありません。

そのときから、シアフはサファリアント(旅行蟻)と呼ばれるように、旅から旅へと歩きまわるようになりました。今でも、あちこちめぐり歩いて、ククがかくしていたぞうの肉をさがしているのです。

いっぽうククのほうは、餌をついばむとき、かならず足で餌をかきちらかします。地面や泥もかき分けます。これは肉が下にかくされていないか捜しているのです。

ここで、おはなしはおしまい。

記/絵：伏原納知子